

---

# 幸せへのチケット

小田切 隆信

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せへのチケット

### 【Nコード】

N9241C

### 【作者名】

小田切 隆信

### 【あらすじ】

作者の実体験を基に制作されました。泣き虫の兄ハジメと、生まれながらにして病気を抱えた妹みやこの、困難を乗り越えていく実話のストーリー

## 第一話 ハジメとみやこ

この話は作者の実体験を基に制作したフィクションであります。

1990年12月7日岡山県に男の赤ちゃんが産まれた。

その男の子の名は

末友 ハジメ

ハジメは非常に大人しく、同時に非常に泣き虫であった。両親は、最初の子であったので可愛がった。

その4年後1994年6月19日に末友家に今度は女の子が産まれた。その子の名は、

末友 みやこという。

だが、産まれてすぐ、このみやこに命にかかわる、事件が起きる……みやこに最初に起きた事件はなんと、産まれて間もなく、みやこの心臓に穴が空いているということが、発覚した。

直ちに、緊急手術が行われた。手術中のみやこは心臓を停止させ、人工心肺装置に切り替え、仮死状態で行われた。

手術は6時間の長丁場だった。

手術は見事に成功し、心臓の穴は塞がれた。

だが、みやこを襲った悲劇はこれから本番だった……

## 第二話みやこの運命

更にみやこを襲った試練は…

ダウン症…

それは、知的発達や肉体的発達が遅れる病気である。日本には10万人以外の人がいる。

小学1年生のハジメにはとても難しすぎた。ダウン症という病気を樂觀視していた。

「ダウン症の妹がいたって、他の人と何も変わらないよ」

とハジメは考えていた。だが、世間は甘くなかった…

「お前の家には障害者があるけん、遊びにいかん。」

「障害者があるのやだ」

「まだしゃべれもせんのか？」「子供の言葉というのは、時に残酷である。ハジメは決意した。

「僕は妹を守って上げられる、いいお兄ちゃんに絶対なる。」

それから、世間の目と戦いながら成長していった。

それから、5年後

ハジメ小学6年生

みやこ小学2年生

更なる試練が起きた…

ハジメの一歳年下の俊政という男子が波乱を起こした。

みやこに忍びよる魔の手…

ハジメの一歳年下の俊政という男子が波乱を起こした。

みやこに忍びよる魔の手…ハジメにとっても、人生最初の試練である。

この俊政は非常に荒くれものである。

年下イジメを繰り返す奴だった。

俊

政がある日みやこに目を向けた…

みやこはイジメられたのだ…

それを知ったハジメのとった行動は…

### 第3話お前にわかるか！！

ある日、俊政がみやこに話しかけた…

「お前、小学2年生になつても、言葉一つしゃべれんのんか！？  
頭の悪い俺でも、しゃべれるのに！！

馬鹿を通り越して、エイリアンじゃがん！！」

そして、みやこを無理やり、男子トイレに連れ込み、殴る蹴るの暴行をした。

そこに、通りかかった先生が来て、なんとか止めた。

そのことは、小学校中に知れ渡り、当然ハジメの耳にも入ってきた。

いつもは、すぐに泣く泣き虫ハジメであつたが、その時のハジメは泣くことを通り越して、怒り狂つた。

普段全く怒つたことがない奴がキレると、止めることが出来ないものだ。それと、同じ状態が今のハジメである。

ハジメは授業中にも関わらず、教室を飛び出し、俊政のいる5年生の教室に飛び込んだ。

「オイ！！俊政！！貴様だけは、絶対に許さん！！」

お前に

障害者のいる家族の気持ちがわかるもんか…

お前なんか、みやこのことがわかるか…

テメーにな、

わかる訳がないよなあ！！俊政！！」

と、叫びながら、俊政を馬乗りで押さえこみ、俊政の顔面を思いつきりひたすら殴り続けた。俊政の顔は鼻血だらけになり、

更に泣いていた。だが、普段はすぐに人のことを許していたが、

この日ばかりは鬼神のごとく殴つた…

教室には、その姿を見て泣きじゃくる生徒ばかりだった。

そして、とうとう俊政が泣き出して、  
「ゴメンって、ハジメ君ゴメンって、もうみやこちゃんイジメから許して下さい。」

さすがに、先生も止めに入った。

だが、ハジメは暴れ続けて、とうとう学校が親を呼んだ。

しかし、両親はハジメを叱らなかった。  
「お前は、妹のみやこを守るためにやったことだ、親として誇りに思うよ。」  
と、言った。

その後数日後、俊政がハジメの前に現れて、こう言った。

「ハジメ君、俺……。これから、ハジメ君が卒業しても、俺がみやこちゃんのこと守るから……」  
心配しないで。」

ハジメは、

「本当なんだろうな!？」  
と、きいた。

「うん。」

ハジメは、みやこを守ろうとした気持ちが俊政に伝わり、俊政を更生させることになった。

それから、俊政とハジメの関係は良いものになり、今でも良い友である。

そして、ハジメは小学校を卒業した。

「ハジメの奴、マジ調子のりじゃし……」

中学になったら、あいつ殺っちゃろうで!……」

何やら、怪しい影が動き出した…。

このことが、これから起きるハジメの壮絶な、  
中学生活の始まり  
だったのである…。

第4話から中学生シリーズに入ります。  
お楽しみに。



## 第4話天敵

は……

ハジメには小学校の時から、天敵がいた。

そいつの名

藤本徹という

徹は、幼稚園の時から塾に通い、頭が良く顔も格好よく憧れの的で、クラスでも、人気者だった。徹とハジメ、幼稚園の頃は良く遊んでいたが、小学校に入ると次第に二人の間にズレが生じ始めた。というのも、ハジメはいつも教室で本を読んでいる、大人しい性格に対して、徹は休み時間はいつも外でサッカーをしているような、活発な少年だったので、よく二人の間でこんなやり取りがあった。

「ハジメ！！サッカーせんか！？」

「ゴメン、僕サッカー苦手だし、サッカーやったとしても、キーパスしか出来ないから、いいよ……」

「なんなんアイツ!?  
付き合い悪いなあ!!」

あんな奴ほつといていこ!」

次第に二人は不仲になり、徹がハジメを差別したり、仲間外れにしたりするようになった…。

「仕方ないよ…付き合い悪い僕が悪い  
しかし、ハジメは、  
んだし…」

という風に今の現実を受け止めた。

だが、徹のイタズラはだんだんエスカレートしてくる…

「あれ、昨日買った消しゴムがない…」

「鉛筆も全部芯がおられてる…」こんなことは、日常茶飯事で…

「僕のシューズが落書きされて、ゴミ箱に入れられとる…これは酷いよ…」

小学生のハジメには精神的にキツイものである…

「あれ…机の上に落書きがしてある…死ねって書いてある…」

ある時は徹自ら、  
「あれえ！？ゴメンハジメ君の給食にチョークの粉を間違えて入れちゃった…」

さすがにこれには先生も見かねて、徹を叱った。だが、徹は聞く耳を持たなかった。

「アイツのこと、これからも中学になったら、更にイジメちゃろうで…！」

ハジメと徹は2003年小学校を卒業した。

「中学には一体どんな奴がいるんだろう…」

ハジメは不安で押しつぶされそうだった…

## 第5話 徹の陰謀

2003年ハジメは中学校に進学した。

ハジメが進学した中学はワルが多いことで有名だった。ハジメはあまり自分から友達を作ろうとはしなかった。そんなハジメにある男子が話かけてきた。

「えっと…確か名前は末友君だよね？俺の名前は川藤順次っていうんだ！！友達になろうぜ！！」

「うん！！こちらこそ、お願いします！！川藤君。」

「そんな、堅苦しくなくていいよ、みんなから、俺じゅんちゃんって呼ばれてるから、そう呼べよ！！」

「うん！！じゅんちゃん」

だが、実はこの順次は、ハジメに接触する前から、ある男と接触していた…。

順次と接触していた人物というのは…。

藤本徹だ…。

「オイ！！徹！！さっき、お前がこの前言ってた、

ハジメとか言ってた奴と絡んできたぜ！！

お前が言ってた通り、いかにも、イジメられキャラって感じだったな！！」

「だろ！？アイツは小学校の時からあんな感じだったな。でも、一回だけ

なんか妹のことで、一歳年下の奴ボッコボコにしたこあったな…。」

「それ、めっちゃおもれえがん！！その時のことをもっと詳しく聞かせてくれ！！。」

「実はな、アイツの妹…。」

「マジかよ！？アイツの妹身障かよ！？それってネタにしてアイツキレさすこと出来んなかな！？」

「まあ、待てよ…。俺にも、もっと仲間が必要だ。じゅんちゃんのそっち系の友達と仲良くなりたいたいから、俺に紹介してくれ…。」

「わかった！！そっち系の奴らならこの学校にいっぱい来てるからよ！！」

「サンキュー！！アイツを殺るのは準備がすっかり整ってからだ…。ハジメの奴今に見てるよ…。」

徹の計画は静かにスタートした…

## 第6話 刺客

ある日、ハジメにある  
男子が話し掛けた。

「なあ、お前が、末友  
っていう奴!？」

「うん…そうだけど。  
それが何か？」

「ヒヒヒ!! お前の顔!!  
マジ、でめきんじゃわ!!」

なんだ!?! こいつは?  
初対面なのに…

と、ハジメは心の中で思った。

「君は一体誰なの?  
名前は？」

「ヒヒヒ!! こいつなんなん!?! 俺の名前か!?!  
名前は、助延浩一郎だよ!!」

なんだ…うざいなあ  
早く消えろよ!

ハジメの内心は今に立ち去りたかった。  
しかし、浩一郎は執拗に…

「お前は、背も低くて、キモいし、最悪じゃな!!」「うるさいなあ!!」

「黙れよ!!」

すると、今まで笑っていた浩一郎の表情が急にかわり…

「はあ!! テメエー調子のんなよ!! お前の小学校の時のこと全部知つとんじゃぞ!!」

「一体誰が…」

ハジメの頭には、一人の人物しか浮かばなかった…

ハジメの、背後から、

「オウイ!! 助延!! 誰と話ししょん」

「あ!! 徹とじゅんちゃんじゃがん!!」

何!!? なんでその二人がつるんでいるんだ…

ハジメも最初は徹だけが、関係していると思っていた…  
中学で出来た最初の友達の、順次が…

この時、なんとなくだが、全てがわかったような気がした…。

「騙してたのか…」

順

「騙した!? 人聞きが悪い こというなや!!」

徹

「ハジメ、俺とじゅんちゃんは単に友達ただけだぜ！！

浩

「ヒヒヒ！！俺はじゅんちゃんに徹を紹介してもらったんだ！！  
徹はいい奴だぜ！！ヒヒ」

徹の奴は一体何を考えてるんだ…  
俺に何をするつもりなんだ…。

徹

「ハジメ！！これから、じゅんちゃんや助延と仲良くしてくれよ  
！！」

「うん…わかった」

これは、徹が送り込んできた、刺客とでもいおうか。

刺客はまだこれからだった…。

## 第7話部活

ハジメは、中学生になったら、陸上部に入ろうと決めていた。

ハジメは、小学生の時からチームプレーが苦手だった。だから個人競技の陸上部にした。

というのが、本当の所だった。

陸上部新生は僕以外にもいた。

その中でも、ひととき身長が高い男子がいた。

名は、前田正人という。

こいつは、成績優秀でスポーツ万能という、絵にかいたような、優等生だった。

先生からの信頼も熱かった。

だが、本当は…

裏では、かつあげや万引きを平気でするような奴だ。

ハジメも、一緒に部活をしていくなかで、薄々は気づいていた。彼もまた、徹からの刺客の一人であると…

正直、走ることにに関して正人には全く歯が立たなかった…

そんなある日、正人がハジメに突然こんなことを言ってきた…

正



「末友！！ちょっと、金くれん？」

ハ

「なんで！？」

正

「いいじゃん！！」

ハ

「でも、金ないし…」

正

「うつせえ！！ええけん 金だせや！！カスが！！」

ハジメは正人にこうやって金をかつあげされる日々が始まった。

かつあげは週に三回

金額は千円から二千元  
程度だ

だが、この頃のハジメは定期的にお小遣いを貰っていた訳ではなく、  
かなり厳しいものだった…

だが、正人のイジメは

かつあげだけにとどまらず、部室で

「オイ！！クソ友！！」

今日の部活のメニューなんなん？」

「え！？知らないよ…」

「はあ、知らんじゃねえだろうが！！！テメエー体だせや！！」

「ちょっと!!何するん?」

部室にはボコ、ボコ            という、鈍い音だけが響き渡った…。

周りの部員も誰一人として、助けようとしなかった…。

「なんで…ここまで

されんといけんのん…」

「徹にとってうざい奴は みんなから、殺られる運命なんだよ!!」

まさか、こんなとこにまで、徹の魔の手が伸び    ていようとは…

ハジメには、想像もつかなかった…

部活中だけにのみならず、学校に居ても、突然    ハジメの教室に  
浩一郎が入ってきて、

「おーい、末友!!今日もキモいな!!」

といい、おもむろにハジメのノート全ページに    落書きをしたり、  
シャーペンを壊したりと、まともに文房具が揃った日はほとんどな  
かった…

更に、妹のみやこにも不幸が…

## 第8話 狂い

ある日父の辰巳が

あることに気がついた

「あれ…なんか

みやこの姿勢左に傾いてないか？」

確かに言われて初めて

みやこの体が左に傾いていることに家族が気付いた

母美輪がみやこの背中を見てみると…

なんと背骨自体が左に曲がっているではないか！！

辰巳と美輪は慌てて病院にみやこを連れていき レントゲン検査  
をすると左に四十五度傾いていることがわかった

医者から告げられた病名は…

脊髄曲湾曲症

というものであった  
して

医者にはもっと大きい病院に行き入院

背骨を針金で真っすぐにする手術を受けないといけないという

家族一同絶句した…

一番悲しんでいたのは母美輪だった…

美

「なんでみやこだけがこんな目にあうん…  
なんでもっと早く気付いて上げれんかったんじゃろ…」

美輪は数日間泣き続けた…

ハジメも同じであつた…

ハ

「一番そばにおつたわしが気付かんかったんじゃろ…兄として最悪じゃ」

それから1ヶ月後まで 病院にはあらゆる手術の予定が詰まってい

みやこの手術はそれからになった

一応医者が言うには

この手術自体はそう難しくはないが、二、三ヶ月は痛みで歩くことや

ベッドから降りることも出来なくなるらしい…

それから末友家の生活は狂い出した…

祖父隆之と祖母藤枝が 些細なことでケンカし 隆之が家出をする騒動があつたり…

辰巳と美輪も手術のことやいろいろなことで気が立っていたこともあり 滅多にケンカをしない二人が大喧嘩をした

なんとかハジメと藤枝の二人が間に入って納めたが…あらゆることが狂い始めた…

そしてハジメが一番恐れていたことが起きた…

## 第9話限界

ハジメがもつとも恐れていたこと…

妹が病気にかかっていることが徹にバレてしまった

どういったルートで広まったかは知らないが  
恐らく早いペースで  
その情報は広まった

徹

「オイ！！お前の妹みやこさんだっけ！？なんか背骨が曲がる病気か何かになったんだろ！？最高にお前んとこ色んなことが起きるよなあ！！マジこいつん家の家族に生まれなくて良かった！！」

ハジメは何も言い返せない自分に腹が立った

自分のことならまだしもみやこのことや家族を馬鹿にされたことに腹が立った

だが言い返せなかった…

言い返すことによつてまた何かやられる…

ビビッていた…

みやこの手術が2004年の8月に行われることが決まった

月日は経ち2004年

ハジメは中学二年

みやこは小学四年になった

更にハジメに対するイジメはエスカレートしていった…

ハジメの給食はいつも何かがないのは当たり前で  
体育の授業中はハジメふの暴力の時間となり

他の授業も必ず文房具の何かが壊されていて満足に授業も受けるこ  
とが出来ず

美術の作品のほとんどは破られたり落書きをされたりで、満足に提  
出することもままならなかった…

かなりハジメは精神的に追い詰められていてだんだんと学校を休み  
がちになりだした…

それでも不登校にはなりたくなかったハジメは苦しみながら学校に  
バスで通っていた…

バスの中でも徹にゴミをぶつけられたり、イジメは行われていた…

バスの中でもハジメは絶えず震えていた…  
体が震えるのがこの頃から癖になりだした…

とうとうハジメの体は限界を迎えて  
ストレス性の胃潰瘍になってしまった…

ハジメは両親に心配をかけまいと

「ちょっと夜遅くまで勉強したり、テレビを見たりして疲れが溜ま  
っただけなんよー!!」

と嘘を尽きとうしハジメなりに家族に負担をかけまいとした…

さすがのハジメも薄つらと自殺すること考え始めた…

胃潰瘍が治りまた学校に登校してみると机には  
あらゆる落書きが書かれていた…

その内容はみやこのことに関するものであつたりハジメ死ねや  
もっともハジメにダメージを与えた落書きは

末友お前が消えることを学校中が望んどんじゃ…

ハジメは心を決めた

俺が消えることをみんなが望んどなら

叶えて上げよう…

それでみんな喜ぶならば…



その日の深夜…

ハジメは一人森に行った

ロープと踏み台を持って…

## 第10話 職場体験

ハジメは持ってきた踏み台を木の幹のそばに置き、木の枝に持ってきたロープを巻き付けた…

そして、台に足を乗せ、ロープの輪に首を入れようとした時…

ある子供たちの笑顔がふと頭をよぎった…

それは、ハジメが6月に あった職場体験の時のことだ…

中学では6月ぐらいになると職場体験がある、そこでハジメは幼稚園に行くことにした。特に意味はなかった子供と遊べて楽しそうだと思ったからであった。

幼稚園はハジメが通っていた幼稚園に行った。

幼稚園児たちは最初は恥ずかしがってなかなかハジメに寄り付かなかった。

ハジメもとても人見知りが激しく、恥ずかしがり屋なので子供たちに近寄りにくかった…

ハジメはどうしても、この状況を打破しなかったのだ…

「ヤバい！！死にそうだ！！」  
と叫びながら倒れた。

すると、子供たちが心配そうに、ハジメに近寄ってきた。  
それを見計らって子供たちを捕まえた。

作戦通りだった。それをきっかけに子供たちと打ち解けた。

子供たちを観察しているといろんな子供がいてとてもハジメは楽しかった。

その中にひとりぼっちになっている子がいた。その子の名はよしあきという。一見普通の子供なのだが、とても落ち着きがなく、いつも暴れ回っていた。

ハジメは、

「凄い、やんちゃな子だな……」

と、思っていた。

だが、それには深いわけがあった……  
それは……神経に障害があったのである……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9241c/>

---

幸せへのチケット

2010年10月10日23時13分発行